

エンドレスワールド

流星ノア

1話 虚空の世界

「こいつは一体どういう事だ？」

高校生の島谷 蒼耶（しまたに そうや）はそうつぶやく。
自宅の隅から隅を調べても家族の姿が見当たらない。
人だけがいなくなったように静寂で締め切っていた。

「そして誰もいねえんだよなあ...。」

朝の通学路 郵便配達やら、公職員の姿も見られるはずなのだが何も見当たらない。

「変な朝...」

そう、変な朝 何の変哲も無かった学校生活にちょっと付け加えられたスパイスだと今思っていた。
それに蒼耶は困らなかった。何故ならクラスメイトなどには通学路で会っているからだ。
蒼耶は自分の家に誰も居なかった事を打ち明けるとどうやら同じ事態に見舞われていたらしい。

「なんつうか、サプライズでもあんじゃね？」

勘ぐり深い奴がそう言った。蒼耶も納得しながら歩いていた。
そして、学校へと着いたのだが...

「だーれもいねえよな」

「そうだよねー」

皆、男女問わず教員室に足を踏み入れるのだが誰もいない 蛻の殻だ。

「今日休みじゃねえもんな」

休みでもないし、教師が誰もいないという事もあって
皆、運動場を使って遊んでいた。
蒼耶は一人屋上へと向かった。何となくだ ただの気まぐれだった。
でもそんな気まぐれによって こうも世界の状況が分かるとは思わなかった。

フェンスに手を掛けて運動場を見下ろす

「どうするかな...。」

暇をつぶそうにも、屋上といってもする事がなく何となくフェンスに腰を掛けて空を見上げた。空を二度見する反応を見せてから驚愕した。

「え、いや 空がおかしいぞ...」

何故、空がどす黒くなっていたのか
そして皆気づき始めていた。動揺によって皆が密集し出していた。

蒼耶だけは空を見上げていた。蒼耶だけは...。
やがて、空が自分を襲うような感覚に蝕まれた
麻薬のような感覚 ドラッグ吸引して中毒症状の幻覚に陥ったような感覚にも似た何ともいえない酔いだった。
泥酔状態のような感覚ではあるが、意識は正常だ。

真っ暗な背景に長髪の中世的な顔つきの男が現れた。

「君が選ばれたのか」

「俺を知ってるのか？俺は知らねえぞ」

長髪の男には見覚えが無かった。周りにはこんなに長く伸ばして髪の長さが似合う男などいない。

「私も知らないさ 君が選ばれし者というだけさ」

「選ばれたのか？俺は 誰にだ」

長髪の男が淡々と喋る

「この世界には もはや君達の家族はいない
消されたのだ 世界から 故に今この世界は高校生だけしかいない」

「...。」

意味が分からないと感じた蒼耶だが、そいつの話をちゃんと聞かなければ分からないと思ったので

長髪の男の話待っ

「いい身構えだね

この世界は何度も作り替えられている アップデートし続ける世界

実験世界というやつだ この高校生という設定で作られた君達高校生だけがちゃんとした生命体なんだ

家族は全て架空で設定で作られたオートマタだ。

君が何にもピンと来ないのも この世界で作られたバリアに守られているからだよ

今リミッターを解除してあげよう。」

長髪の男が近づき肩に触れると同時に電撃のような感覚に襲われて思い出す

「俺は、生命体。

より良い生命体とは何なのか それを作り出すために実験体として派遣された生命体

色々な時代を選択しては実験を繰り返された。そしてそれらの後に俺たちに待っているのは浄化。

元々派遣として作られた生命体だったからだ 俺たちの存在意義というのは存在しないという訳だな

でもじゃあ何故俺を助けた？ 俺達を生み出した創造主が。」

長髪の男は創造主だった。蒼耶や高校生たちを生み出した生みの親である。

「私もね、この世界では創造主という肩書なだけなのだ。

異次元へいけばただの一般人だよ。」

異次元を開ける。創造主は異次元転移を使おうとしている

しかし、蒼耶は説明を受けていた記憶がある。異次元転移を使うという事は反逆となるのだ。

そこで実験は中止され皆が犠牲となる

「創造主は...お前は逃げるのか？

「私は君達を子供のように思ってしまった だから誰かを助けたかったんだ。」

異次元転移は一人だけしか転移が出来ない

「もっとも優れた者が俺という事か？」

「はは、違うよ もっとも気まぐれな奴さ 優れた者を選んでも意味がない
それに 優れた者はもうとっくにこの世界の惨劇に気付いているだろう
だから密集して皆を結集していたんだよ」

納得する蒼耶。確かに率先して皆を招いているような奴がいた。

「でも俺でいいのか？」

「いいのさ」

「蒼耶 君が生きている世界は実験道具のようなものだ そして他に様々な世界がある
君はそれらを異次元転移を使い行き来する権利がある。
そしてこれが最後の選別だよ」

創造主は蒼耶を異次元転移へと放り投げて創造主の外見は変わり やがて頭蓋骨だけとなった、
創造主の力が流れ込み蒼耶は創造主の知識を吸収していた事を感じた。
行き来する世界の事が分かるといった所だ。

蒼耶は、皆から譲り受けた権利によって生かされ続けていく。

2話 世界謳歌

輪廻転生世界

輪廻転生していく中で生物はやがて人間になる。 その人間には様々な能力が宿るという。最初から翼が生えていたりする人間や猫耳がついていたりなど様々な人間がいる 輪廻転生世界とはそういった世界だ。

蒼耶は、創造主から貰った知識で異次元転移を閉めると辺りを見回す
宇宙の黒い空が見える世界

黒の歪なものが身に移る

「これはアメーバ？」

アメーバ状の黒い液体が浮かんでいた
これがこの世界の成れの果てだと確信した。
輪廻転生はしたが、後退する進歩を辿った成れの果て
皆が輪廻転生 生物が進化するものだと確信しているが
間違った成長を遂げれば このようなアメーバ状の黒い液体となるのだろう。

蒼耶は再び異次元転移を使いこの世界を後にした。

するとアメーバは形を変えて液体が飛び散った
アメーバ状の液体はコーティングのようなものだったのだ。

「なんだあいつ」

液体から抉り出たのは肉体美の誇る筋肉生物ドルフィン
筋肉生物ドルフィンは地上を拳で叩き割り、星を木端微塵にしてから星ごと太陽に投げ落としてビッグバンを引き起こした。

「おもしろそうだから俺あいつ探す事にする そして破壊して更なる進化を紡いでやるぞ」

ビッグバンと共に開いた宇宙はブラックホールとなっておりそのまま異世界へとワープした。

魂の世界

魂を再生できる人間や生き物がいる世界

戦いで巡り巡る世界 戦いでは何回も殺す 魂が再生される限り戦う

魂は消滅されない。 魂は消滅する事はない。

魂が何らかの輝きを失うと魂はどこか別の魂の世界へ移動して輝きを取り戻すまで生き返らない

。

戦う人々がいた。

影では強力しあう村もあった 皆が手を取り合う村

しかし、その後焼却されるのが世の常だ こうして憎しみが始まる。

魂を取り戻した奴が呟く

こうしてまた新たに憎しみを招き魂を食らい再びループし続ける

腐った世界 そしてこの惨状から決して逃れられない

それでも諦めずにまた助け合う

殺意の世界

悪が主役の世界 人を殺す事によって願いを叶える力を得る事ができる

無数の白骨体 血で塗りつぶされた世界

闇を司った奴は一つの生物を愛した

愛して愛したがゆえにそいつの隣で眠った そしてその生物に食らいつくされた

その生物がこの巨獣 巨獣と共にいる事が願いだっただ

ドルフィンが異次元から出現して巨獣を一撃で仕留める

蒼耶はやばいと悟り異次元転移を床に出現させてワープする

「逃げやがったか まあいい」

支配者のいる世界

人の生死が不定期になった世界 世界を支配している生物に魂を喰われているので犠牲者はラン

ダム

いつ誰がどこで死ぬか分からない それを阻止する為に世界を支配している生物を倒す事にした
支配する生物 に対抗する為に兵器を扱う 皆が協力して滅ぼす事に成功した
しかし、支配者のいる世界が意味を成す世界でなくなり 世界は崩壊を始めた

―――

生物保管の世界 生命を保つための世界

生物達は一回飢餓により殺してしまったのでがれきになっている

人を殺す事により生命を保てる 一定の時間が過ぎれば生命が朽ち果てる

一定の時間になる前に異変が起きる 人を殺さずに放っておけば生物保管の世界の主人公はおかしくなり、

食欲しかもたない生物のように大切な人・近くにいる順から

生命がちゃんと保てる一定区域になるまで殺し続ける 生命を急激に吸い取ってしまう弱点のよ
うなものもある。

また、誰でも主人公の為に殺せば主人公の生死を保てさせる事ができる。 また、主人公の他にも
いる。

主人公とは違った生死の保ち方を持つ人もいる。

主人公は老いることがない。

生命を保つ事ができなくなれば死ぬ。

生命を保つには殺す快感が食べ物になる。

好物もあり 大切な生物・動物

人

生物・動物

の順である。

この世界にいる住人はおかしくなると狂人化、瞬時に好物順と近くにいる者を計算して両方を計
算し、

優良順に生命が一定区域に達するまで殺し続ける。

ここに存在していた主人公こそがドルフィンだった

ドルフィン大切なものまで破壊していき全てが壊れた人格者となったのだ

生物保管から輪廻転生世界へと渡り世界を壊していった。

―――

内なる心の世界

片目に闇の心が宿ってしまった人達

闇の心の住人の話を聞いた人達は闇の目を持つ生物に会いに行く

蒼耶はここで自分を確認した

生命体の源はこの住人だった 闇の心が宿ってしまった住人を吸収して蒼耶は更なるものへと進化した

もはや人間の姿ではなく獣と化した 獣と化してからは言葉をしゃべる事が出来なくなり自制心で世界を探求していく

人から人を作られた人が主人公の物語 作った主人がいなくなり探す物語

無人世界 その物語の基盤の人数しかいないような世界

こういったバグ世界は世界に多くある

クリスタルの世界

全ての属性を持つクリスタルがあった。 そのクリスタルは強力な力が秘められている。

そのクリスタルを奪うためにクリスタルがかくしてある場所へ主人公が向かう。

クリスタルはある魔法使いの手によって砕け散る事になった。魔法使いはそのクリスタルに魔法をかけた

クリスタルは属性に分かれたクリスタルとなった

全てを叶えさせるクリスタルだが小さなクリスタルでは小さくしか叶えられない（属性によってかわる）

魔法使いの行方を追う物語

物語の中でクリスタル所持者が次々と現れてくる

属性によってクリスタルの分裂度が異なる。

例

風属性のクリスタル 分裂度 3つに分かれている

水属性のクリスタル 分裂度 2つに分かれている

分裂していない属性のクリスタルもある。

魔法使いとの決着が終わり クリスタルと主人公は結晶化していた。

何を犠牲にして幸せとなれるだろう 主人公とクリスタルの前には毎日祈りが後を絶たない

創造の世界

すべてを希望に満ちた星を創り出せる方法がある
その方法には条件がある その為に行動する物語
創造の果てに破壊があった 蒼耶はそこに実験世界と同じ考えを抱いた

墓標の世界 一面中 墓標だらけの世界

死んでいった人達の思い出となった場所を舞台に繰り広げていく物語
生まれ変わった時にその思い出は記憶に刻み込んでいるのか

記憶は思い出さなければ思い出せないものであり、思い出す事も厭わないものだ
墓標だらけの世界に一体の生物がいた ドルフィンだった。

「さがしたぞ」

話をきける蒼耶でない事に気付いたドルフィンだったが、

「俺は ここに用があった。大切な記憶が思い出せれば俺も純に変わると思ってな
しかしそんな事はなかった そしてお前もその口だろ
まあ今日は見逃してやるよ」

墓標だらけの世界で自分の存在意義を問う蒼耶だった。

日記上の世界

○年○○月○○日形式で物語を繰り広げていく
日記形式な物語

日記上の世界は誰かに破られておりバグっていた。
そこへログインすると生命体の存在も危うくなる いきなり四肢が切断されたりする
なので、蒼耶は早々にここを去った。恐らく日記上の世界は早いうちにデリーとされる いや放
置されるのだろうか。それは誰にも分からない。

もしもの世界 正体はデータベース都市 この世界に対しての侵入者は、この世界を堪能できない

もしもの世界へと入る事となる

悲観な人生をたどってきた人がある日、俺を昔に戻して人生やり直させてくれと

願っていたら自分がいた世界が昔に戻っていて自分の人生と違う人生が歩めることとなった物語

成功者となり人生を謳歌したその世界の主人公と会った。暗い人生があったのか

蒼耶を見ても何とも思わずに接していた。

「君に何があったかは分からない でもさ、こんな世界でも僕は気に入っているよ ただの仮初でも 妄想でもね」

ワイングラスを眺めながらそう言っていた。

忠実な僕の世界

この世で最も忠実な僕がいた。

僕達は人形、機械だったり形成は様々だが何一つ主人に忠実なのだ。そんな忠実な僕達による物語。

僕のいる世界、糸で絡められた人形達 僕のマスターである人物が仕組んだものだった。

投身自殺を図っていた 僕たちが設計して作った電車に飛び降りていた

僕たちが世界をつくり社会をつくり国民も僕だったのだが 不満だったのだろう

何が不満かって？自分の心がだろう 自分の心の目に見えない心に不満をいだいて そして後悔をして死んでいったのだろう

マスターがいなくなった僕たちはそれでも社会が回るなら動き続ける 人形の如く。

感情が偏った世界 喜怒哀楽の一つに偏っている

喜怒哀楽

その各感情を全て司るのが一般的。

一つの感情だけに偏り過ぎると奇人・変人へと生まれ変わるはめになる。

奇人変人がそこにはいた 喜びを司る者、怒り、悲しみ、楽しさ どれかを司る
それぞれ大勢いて 賑やかだ 賑やかであり、それは耳が痛くなるほどの大きさだった
ライブ会場の比ではない 蒼耶はうるさすぎてそいつら全てをぶちのめす事にした。
うるさいのは動物となった蒼耶でも破壊するべき対象となっていた。

この世界もいずれ削除されるだろう 無人と化したのだから 蒼耶のおかげで。

――

賛否の世界

賛否両論があるからこそ成り立つ世界

しかし、いつしか賛否に100と0の比率を見出した。

世界は偏見と化した。おかしい感情と行動を共に分かち合う世界に

一人主人公は不信感を募りつつ嘘をつきながら世界と共にしていた。

その世界で巻き起こる事件や事柄に首を突っ込むはめになる主人公の物語

生きまくる社会になったり死にまくる社会になったりする

重りがいきなり加重が変わったようにかわるがわる世界

概念がいきなり変わるような世界だ

蒼耶が来た時には既にドルフィンにぶっ壊されていた。

破壊衝動のままに おそらくドルフィンの中にあるはちきれんばかりの無双イライラ加減にぶち
当たったのだろう。

100と0 に決められるのはいいが、あまりに極端すぎれば 自分の気に入らない社会でも生
きなければならない

それらの主張性すら言ってはいけない世界となっている世界には制裁するしかないと思いついた
次第だ。

100と0はなくなり 世界としては0となった

――

地上が機械で出来ている世界 その世界はビッグバンによって粉々にされた世界

なので機械に穴をあけて閉まったらブラックホールに内部の世界が全て吸い込まれてしまう

バグでずっとフリーズしたままだった大地と化した機械がフリーズから復帰し修復して動き出す
物語

機械というより素材が石だったり大地そのものだったりする

バグだらけの世界となっていた 機械自体が自動更新されなくなったのか 脆くなっていて使い物にならなくなっていた

奴隷世界 一人しか住んでない都のように惑わせて一緒に住ませようとする 子供一人で住んでいる世界 全て一人で管理出来ている都市
理由は簡単で地下施設に全ての人間や動物を対等に分担させて
操りながら電力の自発電など様々な必要となる事をさせているから

やがてその奴隷世界の地下施設からいきなりミサイルがぶっ放されて子供はびくびくと痙攣してそのまま死亡した。

人に恨みを買うとこういう事が起こるのだ。
神様は見えていなくても人間は見ているのだ。

クリエイターの世界 乙女がつくった世界
純粋だと思っていた人が最終的に悪な行動をする。

「純粋なんかじゃない。
お前は.....悪魔だ！」
夢見心地な世界の終焉 純潔に染まっていた心にヒビが入ったので世界が崩れる

崩れた世界は、怠惰であふれていた。気だるさに襲われそうな雰囲気満ちていた
この世界に旅をしてきた旅行者もいた 異次元旅行者は倒れて何もしたくないといった所だった
こんな崩れた世界に長居は無用という事でさっさと後にする蒼耶だった。

迷宮世界

君の真実を探し出す事が出来れば返してあげよう
謎の人物にそう言われ迷宮をさまよう物語
ある人物がドッペルゲンガーのように何人もいる
本当のそのある人物を殺すためにある人物を何人も殺す物語

そして最後に自分を殺してしまう それがドッペルゲンガーの正体だった
ドッペルゲンガーとは悪戯を司った魔物だった だから蒼耶はそれを八つ裂きにした。

迷宮と思われていた世界は真っ暗闇から明かりがともると天井がない事が判明した
何とも浅はかなトリックの迷宮世界だったと蒼耶は思った。

シアター世界 映画館に世界が入ってる世界

男と女の恋愛物語

しかし、実は女は人工知能ロボットで男はその開発者。

普通の世界と思っていたのは実験創造都市世界で研究施設内で全て創り出されたもの。

ここは愛で包まれていた 二人だけの空間に酔いしれていた

これは破壊すべき対象ではないと悟った蒼耶とドルフィンが二人とも帰っていった。

語り手の世界

この語り手の世界とは何だろう？

え？うげえええええええええええええええ！！

「...。」

とりあえずこの語り手をぶちのめした そしたら俺が解説者となっていた

もしかしてこれは俺が語り手となれるのか？

蒼耶蒼耶うるさいなと心でおもっていたのだが、まさかこんな事になっているなんてな

案外小さい場所で俺らが住んでいるのだな

そしてこれからは俺が語ってやるさ

色々と世界を探求した

しかし俺は自分の存在意義が分からないでいた

終焉図書館の世界

墓が無く 死んだ体は食料などにされる 墓標はなく、書物にして書き記したものが図書館に置かれる

死ぬ間際に人は自分の生涯の全てを記した本を書く決まりになっていた。

全ての心が集約されて始めて希望に終着する。

希望とは何だろうと思っていた。俺は希望をおみだくじのようなもので選ばれて今まで生きてきた

だから無関心でいた。そういやあの筋肉生物もかな？

「俺がどうした？」

びっくりしたな

「俺はドルフィンだ」

ドルフィンは何しにここに来たのだろうか

「無論俺達の決闘だ」

嫌だよ、面倒だ。

「男だろう貴様」

男も女も関係ない 嫌な物は嫌だ それで何が悪い？

「それもそうだな」

ドルフィンは椅子に腰かける その表紙に椅子から真っ二つに星が割れる 筋肉質も大概にしろ

「ここには誰もが集約されている まあアカシックレコードと呼ばれるものらしい。」

ここに俺の事をかけば一生残る記録となるのかじゃあこうしよう

これを図書館に置くと。

作者の名前は流星ノア？なんだこれ 何で作者の名前が入っているんだ？

「それはこの世界を作った神だからだよ 崇めたまえ 俺も崇めているのだからな。」

この世界ってさ、何かバグの塊だらけだよな 欠陥品の寄せ集めみたいな？

「言うな！世界はデリケートなんだ！そしてお前の生命だって選ばれた生命だろう？誇りを持ったらどうだ？」

何かここにずっといたい気分だ ここが皆が眠る場所だからか？

アカシツレコードは 素晴らしい癒し部屋だ

「まあ俺もここにずっといようと思ってる」

じゃあ俺もここにずっといようかな

俺は何もしたくないんだよ ほんと。

て あれ？何か焦げ臭くね？

「ん？燃えてる？」

アカシツレコードの本が全て燃えてた事に気付いた俺達

流石にドルフィンも汗が凄い事になっていた 何故ならさっきの椅子を真っ二つにした時に摩擦で火がついたからだ

するとアカシツレコードの本から全ての生物が復活した

いっきに人口密度がやばくなっていたのでアカシツレコードが自動でだだっ広いフィールドへ変更した。

そこには皆がいた クラスメイトや創造主だ

そして皆を優先していたクラスメイトは笑っていた。

え？これはもしかして ここに誰かが辿り着いてアカシツレコードをいつか9999無量大数年後にでもいいから焼かれるのを予言していたのだろうか？

そして9999無量大数年後も自分たちの生命がなくなった後だから時間的経過が全く意識しない

いわゆる全身麻酔状態と何ら差し障りない意識で復活出来ると予想していたのか？

流石だな 　　というかそれなら創造主も分かっていたのか？これを 　　何とも罪深い事だ

でもそれでも嬉しかった

だって皆とまた会えたんだから

そして皆と永遠の命で生きる事が出来るのだから

何故ならアカシックレコードは永遠不滅の世界だから 　　何もかもが永遠に生き続けられる世界だからだ

さあ 共に生きよう 全ての無限で

「END」